# 学校配置の考え方（例）

資料14

## 共通方針

義務教育における**9年間の一体的教育の実現**（小中一貫教育）
⇒更なる充実のため**施設一体型の義務教育学校**を目指す。

## 市街地校の配置

子どもが多い地域に配置し、学校規模と立地から2拠点を想定する。

## 郊外校の配置

① 東部・西部の両方に、小学校と中学校を維持する。

② 東部・西部の両方に、小学校のみを維持する。

## 小規模特認校の配置

① 市街地に設置する。

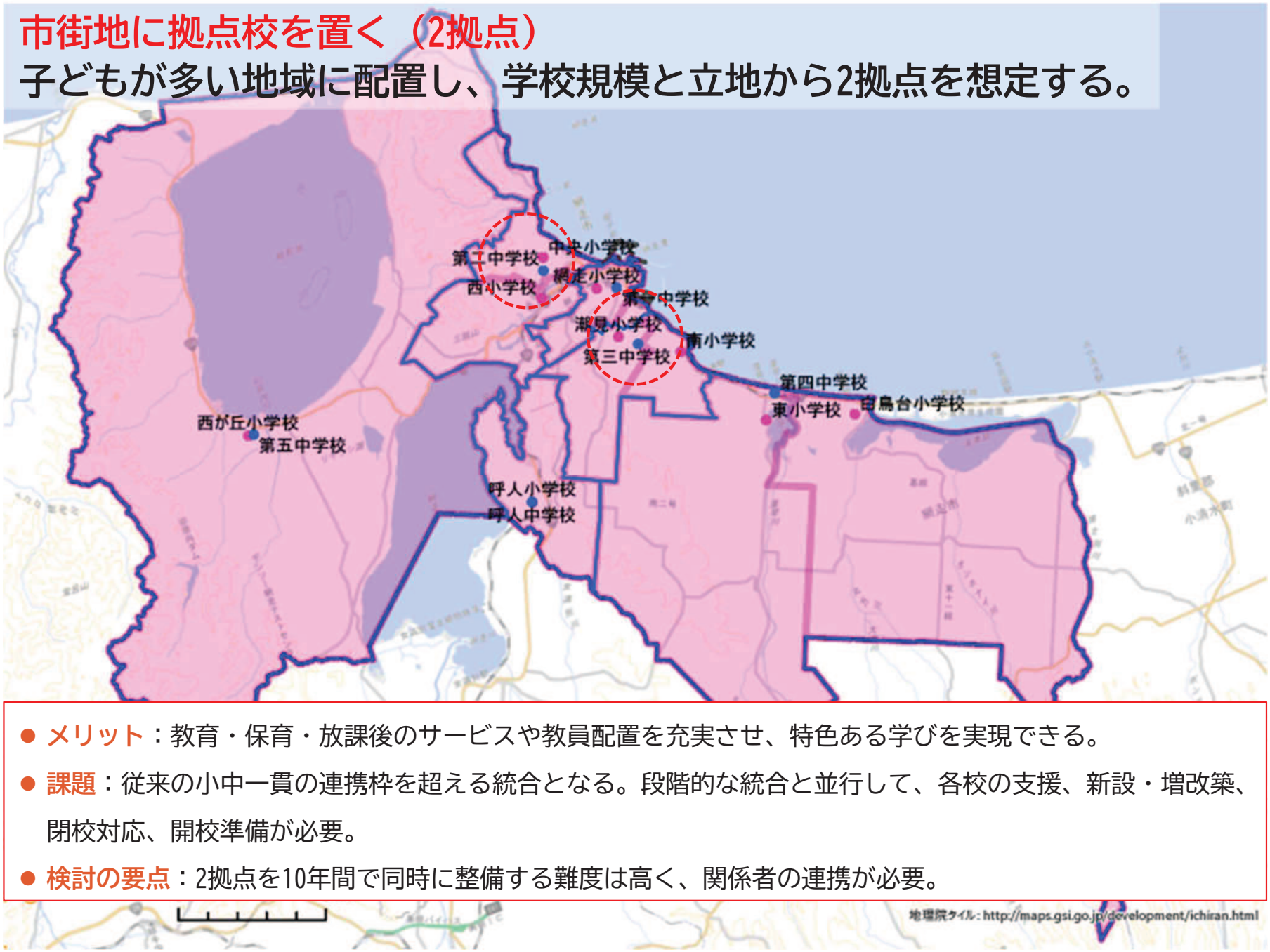
② 郊外の東西拠点を、小規模特認校とする。

③ 現在の呼人小中学校を、そのまま維持する。

# 学校配置の考え方（例）

## 市街地に拠点校を置く（2拠点）

子どもが多い地域に配置し、学校規模と立地から2拠点を想定する。



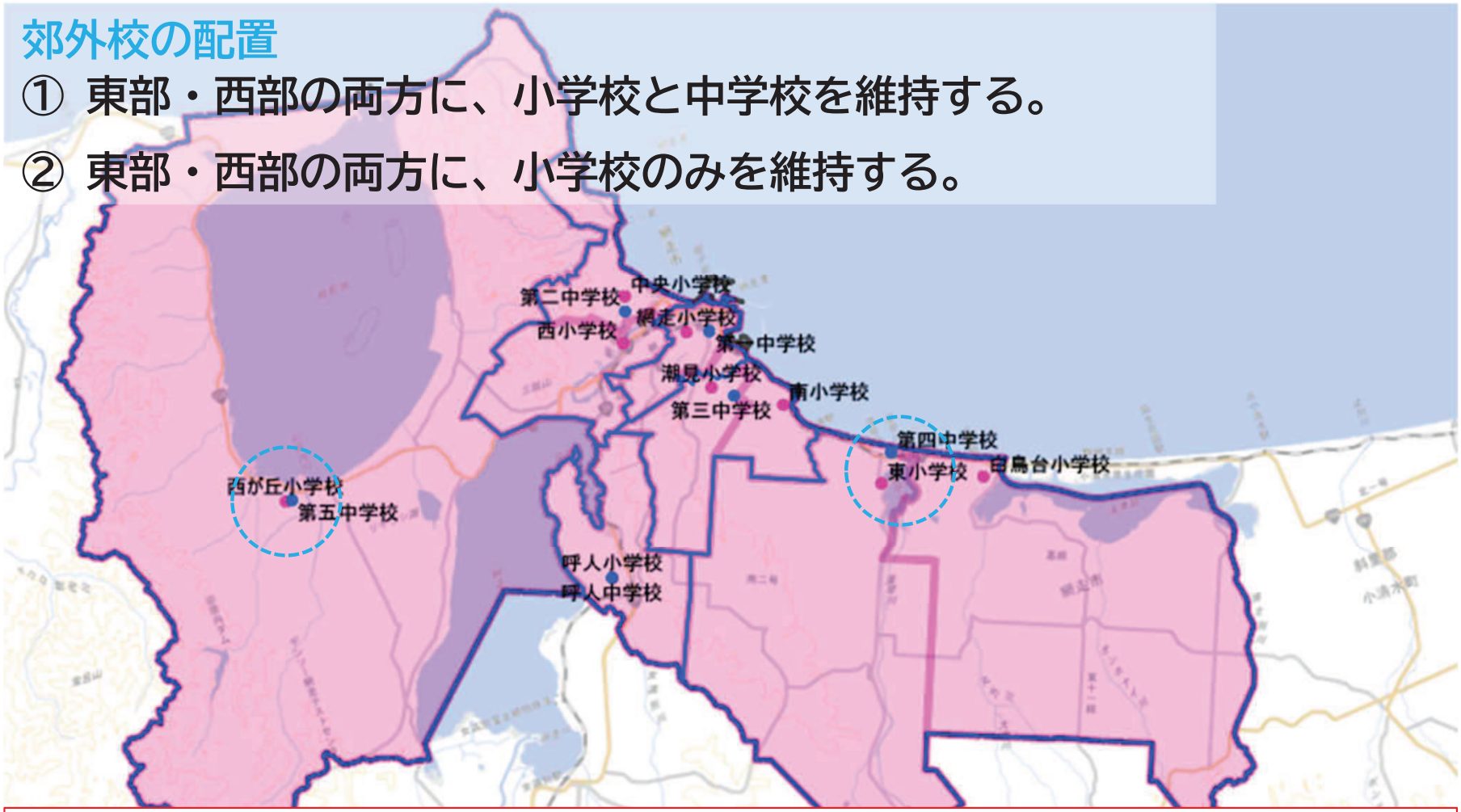

- メリット：教育・保育・放課後のサービスや教員配置を充実させ、特色ある学びを実現できる。
- 課題：従来の小中一貫の連携枠を超える統合となる。段階的な統合と並行して、各校の支援、新設・増改築、閉校対応、開校準備が必要。
- 検討の要点：2拠点を10年間で同時に整備する難度は高く、関係者の連携が必要。

# 学校配置の考え方（例）

## 郊外校の配置

① 東部・西部の両方に、小学校と中学校を維持する。

② 東部・西部の両方に、小学校のみを維持する。




- **メリット**：10km以上の長距離通学を減らし、通学負担を軽減できる。地域と子どものつながりも深められる。
- **課題**：施設の維持費がかかる。2045年まで残す場合、小中一貫教育に対応した増改築が必要。児童生徒数の減少に伴い教職員が十分配置できない可能性が高まる。
- **検討の要点**：学校を残すだけでは文化継承や交流は進まない。地域・市街地との連携を通じ、全市で網走らしい学びを実現することが必要。

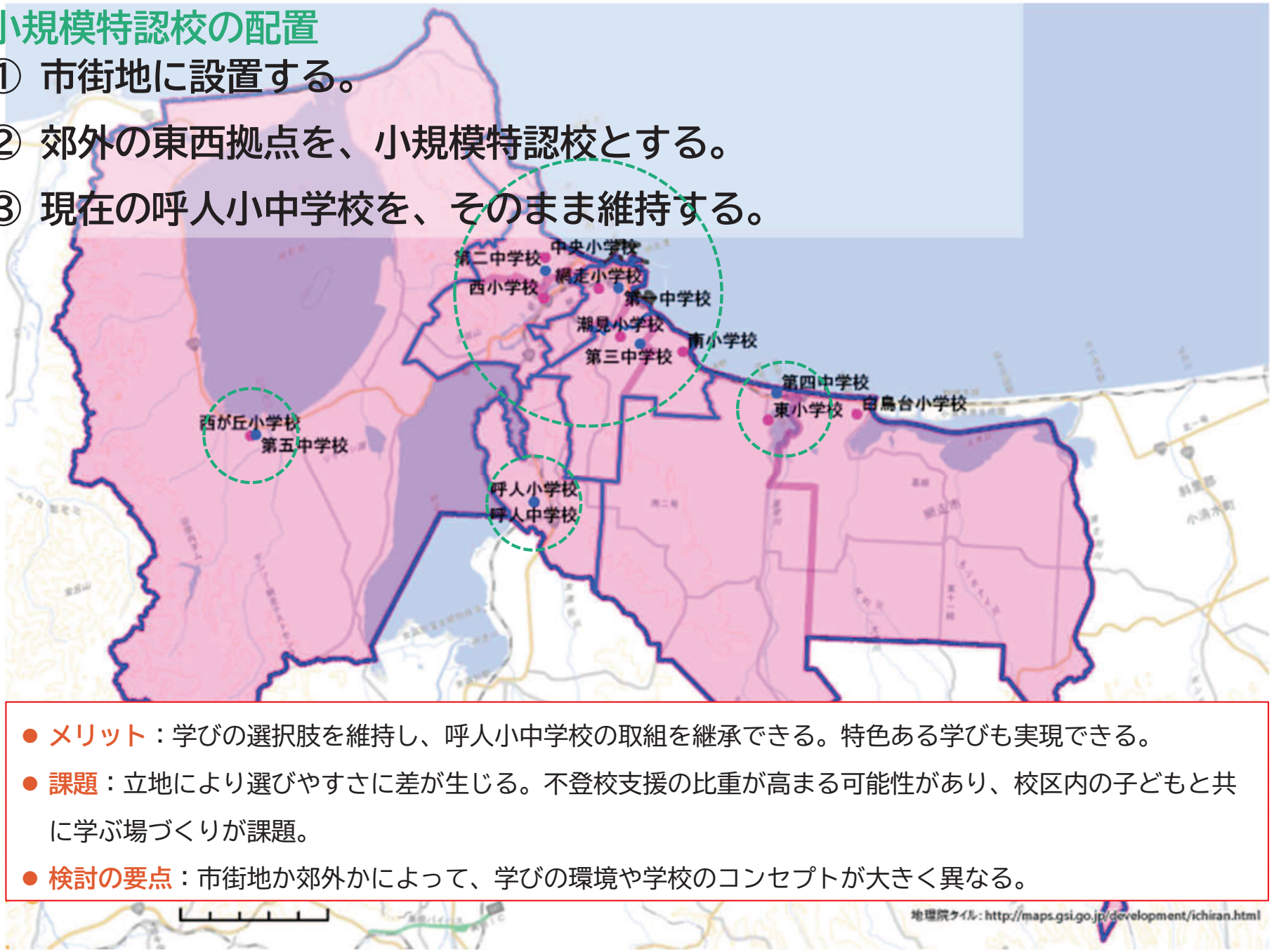
# 学校配置の考え方（例）

## 小規模特認校の配置

① 市街地に設置する。

② 郊外の東西拠点を、小規模特認校とする。

③ 現在の呼人小中学校を、そのまま維持する。




- **メリット**：学びの選択肢を維持し、呼人小中学校の取組を継承できる。特色ある学びも実現できる。
- **課題**：立地により選びやすさに差が生じる。不登校支援の比重が高まる可能性があり、校区内の子どもと共に学ぶ場づくりが課題。
- **検討の要点**：市街地か郊外かによって、学びの環境や学校のコンセプトが大きく異なる。

# 通学シミュレーションの結果

| 配置 | 最大乗車時間 | スクールバス必要台数 | 年間概算運行費用 |
|---|---|---|---|
| 市街地2拠点<br>＋東部・西部に2拠点 | 30分程度 | 11台以上 | 1億2千万円 |
| 市街地3拠点 | 40分程度 | 13台以上 | 1億5千万円 |
| 市街地2拠点＋呼人1拠点 | 40分程度 | 12台以上 | 1億3千万円 |

**試算条件**

車輌の購入・更新費用は含まない

通常便：片道10km以下は市街地（25km/h・時間20%増）、10km超は郊外（35km/h・時間10%増）。

通常便で40分を超えるルート：追加車両は投入せず、配車済みの2〜3台を直行便（平均40km/h・時間増0%）に振り替え。
全員が同一地域から直接乗車する想定。